

Title	K建設会社における最適手許流動性保有量について
Sub Title	
Author	高野博信(Takano, Hironobu) 村井俊雄
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1980
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001980-0090">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001980-0090</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名	高野博信	主査	村井俊雄	教授
	(鹿島建設株式会社)	副査	伏見多美雄	教授
所属ゼミナール	村井俊雄 研		柴田典男	助教授
			太田康信	助教授

## K建設会社における最適手許流動性保有量について

昭和50年代に入り、K建設会社の利益は横ばい状態である。このような状況から脱却すべく、同社は、受注拡大策に加えて、利益確保のための経費節減策を推し進めた。本政策は、コストを節減する一方、効用の削減を強いるものである。

手許流動性保有に対しても、その運用利回りが借入金のコストを下回っていることから、残高を削減し、もって金利負担を軽減するという要請が強い。そこで、手許流動性は少ないほど、コストが小さくなるという前提のもとに、保有せざるを得ない部分を積み上げることにより、最適な保有量を提示しようと思う。

K建設会社の手許流動性保有動機は、主として、

- ① 銀行関係を円滑に保つため、借入金に対応して保有しているもの
- ② 運転資金の変動に備えて保有しておくもの

に分類される。

①については、借入金の実質コストをどう把えるかという観点から、また、②については、運転資金の変動パターンを実証的に分析することにより、それぞれ必要とされる資金量を求め、これを合算した結果をもって、最適保有量とした。

なお、②に関しては、従来、施工高が運転資金需要の目安とされていたが、私は、短期プライム・レートを使用すべきと考え、これを実証することとした。